不知火舞千敗地獄

【では本日のメインイベントがヤッて参りました！　またしてもこの方、不知火舞さんの入場ですっ！】
　闘技場だというのに豪華な照明、意外にも綺麗に装飾された花道。激しく煙が噴き出した扉から、赤の衣装を身に纏い、日本一のくノ一が颯爽と登場した。
　ムササビのように舞い、締まった身体にたっぷりと付いた肉を揺らしながら、体操選手さながら華麗に着地して魅せる。
「よっ、にっぽんいちぃ～！」
　お得意の決め台詞に、会場が沸く。人型から触手まで、色んな化物が鳴き声をアピールするかのように本能的に叫んでいる。
【えー、不知火舞選手、本日も淫魔コロシアムにようこそ！　毎日どうもありがとうございます！】
　司会が陽気な声を淫魔コロシアムの闘技場に響かせる。
　淫魔コロシアム……人間の欲望に付け込む淫魔達が作り出した、異界の闘技場。人間相手では物足りなくなった実力者を招待し、飢える闘争本能を満たす施設だ。どうやってか招かれた者にしか見つけられない道を作り、選ばれた人間のみを招来しているらしい。
　舞はもうここに来続けて、今日で百と一日目だ。人外を相手にするスリルに病み付きになった者は、舞のように何度も訪れるらしい。もっとも、舞が来場し続ける理由は少し異なるが。
【舞選手、スゴくいい笑顔を振りまいてますが、なんと**自慢の戦績は九九九連敗**です!!】
「**くっ……！**」
【今日が一〇一日目ですから、なんと一日にあたり十敗してる計算ですね】
　愛想良く振舞う舞を、小気味いい声が邪魔した。　そう、気丈な態度で挑む舞だが、淫魔コロシアムでの白星は無く、全戦全敗。しかも一日に何度も戦えるため、**挑んでは負け、挑んでは負け**……持ち前の負けず嫌いな性格から、ついにその数は四桁に届くかというまでに至っていた。
　今日も人間界では無敵を誇る強気な舞の敗北を、あるいは――どれだけいるのかはわからないが――勝利を求め、魔界でも随一の巨大な会場を一杯にする妖魔達。せっかちな彼らに合わせ、早くも試合が始まろうとしていた。
【では舞さん、ただ今のお気持ちは】
「今日こそ私が勝つわ！今に見てなさい！」
【**前回は**年端もいかない**少年型妖魔に中出しされてイキまくりながらアヘ顔ダブルピースという無様なイキ恥を晒した**舞さん。念願の千連敗なるか？　それとも千度目の正直なるか？】
　負けることなどまるで頭にない舞を、丁寧な言葉でなじる司会魔。思わず顔をしかめる“記録保守者”の向かいに、挑戦者が移動する床で下から現れた。今回の相手は触手型の淫魔のようだ。直径二メートルはありそうな黒い球体から、十本ほどはある触手を蠢かせている。触手一つ一つが人間の子どもの腕くらいの太さで、先は妙なくびれがあり……早い話、男性器を模している形だ。
【今回の相手は触手チンポさんですね。オッズは舞さん：触手チンポで1000：1！　さぁ皆さん、開始直前まで張った張った！】
　珍妙な異形を小慣れた一言で言い表すマイク音。確かに淫魔には珍しくない、人間の舞も見慣れた系統の魔族だ。だがそんなことより、圧倒的な倍率の差に突っ込みたくなる舞。だが嘲笑う淫魔達に抗議の間もなく、リングの中にはもう舞と触手魔のみ。
「舞ー、**今日も負けてくれ**んだろー?!」「**またチンポに負けるとこ見せてくれ**よー！」
（くっ、淫魔のヤツらめ、バカにして……！）
【初めての観戦者様、もうお気付きだと思いますが、当コロシアムのシステムをご説明します】
　狼狽する舞の様子を愉しむように、試合直前になって司会が最後の説明に入る。
【当コロシアムではよりスリリングな闘いを求める声に応え、対戦相手に勝利した場合、相手を一時的に奴隷にする権利を得ます。ただし当コロシアムはスリルを求めつつも安心安全、来る者拒まず。相手を殺したり、肉体を欠損させてはいけません。では――】
　早口で一通りのルールを終えると、遂にゴングに係員が触れる。

――チンポなんかに　負けたりしないっ！
「不知火舞、参りますっ！」
【……開始ィッ！】
　可愛らしい、だが毅然とした名乗りの直後に甲高い金属音が響き、触手達が一斉にくノ一目掛けてその胴を伸ばす。舞は高々と跳び上がって回避し、同時に触手魔の本体を跳び越えた。落下に合わせて自らを回転させ、背後に回し蹴りを喰らわせる。
「やぁっ！」
　鋭い一撃に、柔らかい魔物の肉球が勢いよく水平に吹き飛ぶ。向こう側の壁まで一直線に向かい、そのまま重厚な音と共に跳ね返る。舞にとって、更なる連続攻撃を叩き込むチャンスだが――
『ズクンッ！』
「っうぅっ！」
　飛び蹴りの着地と共に、舞の身体に鈍い衝撃が走る。無論、予想以上に触手魔が重くて堅かっただとか、いつの間にか攻撃を受けていたわけではない。
　衝撃の原因はフィールドの端から薄っすら立ち籠める淫気にあった。人間では目を凝らしても見えないか、というほどの淫気――本能を刺激する瘴気――が噴き出されていた。勿論“千戦錬磨”の舞は承知の上での試合であったが、効果が効き始めるのが思いの外に早く、思わず怯んでしまう。
【おっとどうした舞、動きが止まったぞぉー?!】

司会者は選手に何が起こったか分かっていながら、わざとらしく囃し立てる。マイクの音を拾ったか、ダメージを受けて硬直していた淫魔が再び触手を伸ばした。
「く……この！」
長い肉蛇が舞の右手、右脚に絡む。四肢に絡んで相手の動きを封じるのが触手系淫魔の勝ちパターンだ。勝利、あるいは敗北の悦びに沸く観客達。
だが、舞の口元には僅かな笑みが浮かんでいる。四肢に絡んでくることは読めていたため、あえて右半身に絡ませたのだ。
（チンポの癖に、いつまでも調子に乗らないでよっ！）
そのまま絡まされていると見せかけ、触手を掴んで投げ飛ばそうとした時――
『ぶるんっ！』
「っはぁんっ！」
柔らかいものを強く弾く衝撃に、舞が高い声を上げさせられる。触手は四肢……手首や足首、あるいは胴に巻き付くと思い込んでいた舞は、ある意味で最も注意しなければならない場所、胸に対する攻撃への対処が出来なかった。淫気により侵され始めていた身体の熱が一気に胸から四肢全体に奔り、みるみる力が抜けていく。
その隙にも触手は舞の身体を絡め取り、読んでいた筈の四肢封じが達成されてしまう。触手で舞を巧みに固定させ、直立のまま両手を後ろ手に縛ったポーズにさせ、周りの客達にも見えやすいよう高々と掲げた。
「っ、しまった……！」
（ああ、ま、またっ……！）
ギャラリーは今度こそ望み通りの光景に喝采する。一度しくじったかと思わされた分、その感激も一塩だ。
【舞、遂に触手チンポに捕まったぁぁぁ！　千度目の敗北となってしまうのかぁ?!】
「じょ、冗談じゃないわよ！」
開始数秒で敵に捕らわれ、そのまま敗戦するなどプライドが許さない。逃れようと両手両足に力を込めるが、足が小さくぱたぱたするだけでろくな抵抗が出来ない。
そんな舞の眼前に、余った触手が顔を出した。挨拶するように首を下げると、そのまま振りかぶる。
「っ、や、やめ――」
『ぐにゅんっ！』
「…っああぁっ！」
【チンポ、再び舞の胸に攻撃！　しかし舞、痛がるどころか、なんだが気持ち良さそうだぞぉ?!】
触手が微妙な強さで舞の大きな乳房を打つ。今までの戦いで淫気には慣れていた舞だが、逆に淫気が身体に馴染みだしたということでもあり、一度淫靡の灯が点いた今、他愛もない責めでも従順に反応する。
「あっ！　んくっ！　こ、この……はぁっ！」
試合開始前から始まっていた胸の揺れを更に大きく激しくせんと触手が往復する。連打に合わせるように、舞の口からは悶える声が出てくる。
【舞、堪らず声が出る！　まさか胸だけでイクのか?!　負けるのか?!】
「っく！　……ふざけないで！」
遠慮のない口責めにほんのり上気して言い返す舞。しかし肌にピッタリと張り付いた薄い破廉恥衣装からは双房の頂点が屹立してしまっているのが容易に見て取れ、本当に胸責めだけで……と観衆達に思わせるには充分だ。
客が勃起乳首を楽しんでいることを知ったか、肉茎が今度は鈴口を衣装越しの乳首に擦り付け出した。
「あっん！」
優しく触れ、なぞり、くすぐり、揉み捏ねる。執拗な責めを両乳首にされ、舞の喉が時折跳ねるように震える。
【舞、**勃起乳首がッ、勃起乳首が**そんなにヤバいかッ！】
「はぁっ、あく、だ、誰がっ！　くぁ、勃起なんて、してないぃ！」
未だ諦めずに身を捩らせ、官能に昂る肉体を否定するくノ一。否定する言葉を聞き、触手が今度は舞の衣装に引っ掛かる。襟から入り込み、ぐぐっと引っ張る。張りの良い峰乳を支える部分まで降りてくると、カリの部分が更に力んだ。
「や、やめなさい……！」
泣き声のような音を出すも空しく、薄布が一気に左右に押し広げられる。大勢のファンの前で、ぶるんっ！　と両胸が曝け出された。
【おぉーっと舞、やはり勃起ッ！　乳首が勃起していたァッ！】
熱の込められた実況と、それをかき消さんばかりの雄叫び。ぷっくり充血しきった乳端への反応が、舞に現実を突き付けた。
「で、出鱈目言わないでぇっ！」
肉の反応を直に見られながら、しかし否定を続ける女戦士。普通の女性ならば当たり前とも取れるが、こと今の舞では声にも覇気が無くなり、甘えるような音色を奏でてしまう。
外気に晒されピクピク震える乳首に、触手が一本ずつ吸いついた。不気味に広がり、小さな口と化した触手の鈴口が紅い尖りを咥え、微弱な力で吸引する。
『きゅぅぅぅぅ……っ！』
「あ♥　だめ♥　**勃起……っしてない**、乳首ぃっ！　吸っちゃだめぇぇぇぇ！！♥」
そこが舞の急所だったのか、抵抗する素振りもそこそこに牝の声を上げるくノ一。ふるふる髪を震わす牝の、今度は股間に別の触手が這う。太い一本の肉鎖が、陰核の付け根から割れ目に沿って擦れ、蟻の門渡りをくぐり抜ける。尻の谷間に亀頭を埋め、谷から顔を出した途端激しく前後運動で密着部分を擦り付ける。更に表面がぶるぶる振動し、二重の刺激を陰唇と尻谷に送り込む。
『ずり、ぶぶぶぶっ！　ずりゅぅぅっ！』

「あっ、そ・ソコもぉっ！？　そ、そんな責め方、あああぁぁぁぁ！」
　弱点を嬲られている所に股間に攻撃され、堪らず悲鳴じみた叫びが出た。高度な責めに舞の官能がどんどん追い詰められ、遂に――
「ああっだめっ！♥　いっ……く……っ！♥」
　ビクン！　と一際強く跳ねるくノ一。すかさず司会が声を張った。
【おおぉ?!　舞、ついに敗北かぁ?!　レフェリーに確認を取ってもらいましょう！】
　審判が割って入り、両選手の動きが止まる。舞はピタリと止まった直後、ぐったりと項垂れた。
　心配そうに審判が覗きこんだ瞬間、敗北疑惑のくノ一が上気した顔を上げ、高らかに宣言する。
「負けてない、イッてないわっ！　さっきのは口が滑っただけ！　こんなチンポなんかに、イカされたりしない！(キリッ!」
　両乳を丸出しにし、勃起乳首を吸われ、股間に触手をへばり付かせた女戦士のものとは思えぬ、闘志に満ちた傲然たる宣言。強気な態度が闘争本能をくすぐったか、それとも混濁した状況が興奮を誘ったか、舞の声に応える観客達。
【……どうやら、続行可能のようです。舞選手、失礼致しました】
　礼を弁え、いかにも申し訳なさそうに、しかしどこか嬉しそうなマイク声。審判の合図と共に、試合再開までの３カウントが取られる。
　応援なのか罵声なのか、とにかく投げかけられる声を聞き取り、舞が気前よく再び宣言した。
「アンタたち見てなさい！　こんなチンポに負けたりしない！　こんなチンポにイッたりしないんだからっ！(キリッ!」
　美しいくノ一の毅然たる公言。自信に満ち溢れた表情に、淫気に堕ちる気配は見かけられない。舞が余裕の笑みを浮かべ、試合再開の瞬間を待っていると、股間に違和感を感じる。
（な……こ、コイツっ！）
　余裕を持って見下ろした途端、目を丸くするくノ一。停止を強制されるストップ中に、股間の触手が僅かに蠢いていたのだ。触手は先端から垂らした白濁汁を舞の褌に馴染ませ、ゆっくりとズラしていた。褌が捲られ、一緒に押された秘肉も合わせて離れていく。いつの間にか、舞の秘部はぱっくりと開かれてしまっていた。
　そして、その秘壺目掛けて鎮座する一本。たっぷりと充血したそれは。表面にはいくつものイボと血管が浮き出て、挿入の時を今か今かと待ちビクビク奮えている。間違いなく、この触手魔の持つ擬似ペニスの中で最も剛い一本だろう。無論、これを構えることも反則だが、舞以外に誰も見咎めない。カウントに合わせ、その剛直が揺さぶられる。
「卑きょ……！」
　舞の訴えは再開の音と、肉がぶつかり合う音と、自身が振り絞る音でかき消された。焼けた鉄のように熱く硬い怒張が深々と突き挿さり、その威力がそのまま桃色の波動となって鎮まりかけていた肉悦を爆発させた。
『ズッボオオォォッ！！』
「おおぉッッほぉぉぉぉおおおおおお！！！♥♥」
　突き挿しに合わせて思い切り仰け反り、瞬く間に絶頂に達する強気くノ一。余りの快楽なのか、大きく見開いた目はぐるんと上を剥き、緩んだ口と涙腺からは唾液と涙が零れそうになる。陰裂からは勢いよく透明の逆りを噴き出し、いかに絶頂が激しいかを物語っている。
「お♥　おほぉ♥　ひ、卑怯者ぉぉぉ♥　こ、こいつ、反則ぅぅぅぅぅ！！♥ 」
【遂に触手チンポが挿さったぁぁ！　いやー、確かに反則じみた強烈な攻撃です。舞、今度こそ負けそうですかね？】
　気付かれにくい地味な反則を都合よくスルーする淫魔達。
「そ、そういうんじゃ……んっひぃぃ！♥　ま、負けてない、イッてなひぃぃぃ！♥」
　どう見ても敗北しているが、司会も審判も、誰も止めようとはしない。一度判定を覆した以上、敗北を決めるのは本人の降参宣言のみだ。
　無論、「どう見ても敗北」していれば審判がストップに入る。しかしその判断基準となる客観性は、今この場の空気だ。司会が「耐えている」と言えば、審判が止めに入らなければそれが基準。舞は**自ら屈服の言葉を吐かない限り、敗北することも出来ない**のだ。
【舞、スゴいアヘ顔だッ、**ホントにイッてないのかぁ?!**】
「いっ！♥　イッてなっ！♥　イッたりなんかぁぁんっ！！♥　んほぉぉっ！　またっあぁぁぁぁぁ！！♥♥」
　司会の煽りについ反抗してしまう舞。芯に埋まった剛直が抽送され、明言せずとも明らかに絶頂の声を高鳴らせる。そんな無様な牝戦士を、観客が、施設に供えられたカメラがいつの間にかけたたましくシャッターを切り、痴態の動きと音を記録していく。
【さぁ舞、これは敗北の記録か、**それとも勝利の記録か**――?!】
「とっ……っ♥　当然っ勝利の記録よおっ！♥　みんな、じゃんじゃん撮ってぇっ！♥　舞が勝つとこ、撮っ……っひぃぃぃぃぃ！！♥　ら、らめっ♥ 撮られてっ！♥　撮られてっっまたぁぁぁぁぁぁ！！♥♥」
　司会の誘導にあっさり乗せられ、「勝利の記録」撮影をせがんでしまう強気くノ一。撮影に慣れているため、出来上がった肉体には羞恥がすぐさま愉悦に変わり、撮影姦にまた強く痙攣した。
　舞が必死に体裁を取り繕っている最中も剛肉は様々な深さで、あらゆる角度で女壺を掻き回す。
『ずぞっ！　ずんっ！　ずぶっ！　ごりぃぃ！』
「あっ！♥　あひっ！♥　チンポっ、いい加減、にぃぃぃ！♥♥」
【舞、まさか自慢のくノ一マンコで触手チンポを責めているのかっ!?】
「そっ♥　そうよっ！♥　こんなチンポに、私が負けるはずないわっ！♥　さ、さあっ！　早くイッちゃいなさいぃっ！♥」
『ごりゅうううう！』
「アへえええッ！！♥♥　そっ♥　そこはぁぁぁっ！！♥　いっ♥　イッてないっ！♥　イッ!!♥　イッてッ！♥　ないぃぃぃぃぃ！！♥♥」
　度重なる突き上げに、遂に弱点を抉り抜かれる舞。艶のあった黒髪は振りたくって脂汗に塗れ、蕩け切った声で愉悦のピークを否定し続ける。
（だ、だめよっ！このままじゃ、ホントに負けちゃうっ！）
　本来ならもう既に敗北している所を、矜持で何とか持ち堪える。弱点が叩き込まれても、肉悦歓喜の涙を零しながら声を押し殺す。

『ごりゅっ、ごつっ！　ごりっ！　ずぶんっ！』
「んふぅぅっ！♥　んぁひッ！♥　んむぅ！♥　んぎぃぃぃぃ〜〜〜っ♥♥」
　もう九九九連敗しているのだ。流石に淫気の愉悦にもギリギリで耐えることができ、膣内に全神経を集中させて肉嬲りに綱渡りで堪え切る。
　しかし、**まだ触手魔には余裕が**あった。胸を嬲っていた触手が再び口を開け、乳首目掛けて畝る。秘部を晒した触手も口を作り、充血した硬く屹立した陰核をすっぽり咥え込まんと飛び込み――
（こ、これ位なら、何とか耐えられるわ！　このまま我慢してれば、いつか向こうが――）
『じゅぷっ、じゅちゅぅぅぅぅっ！』『ぢゅぽ！　ぢゅぅっぢゅぅぅぅぅ！』
（ちっ、乳首っ！　クリトリスぅぅぅぅ！！）
『ズボオッ！！』
「んほぉおおおおお！！♥♥　オマンコおおおおおおおお！！♥♥♥」
　一際強く腰を突き出し、掲げた陰裂からまたしても盛大に潮噴きする強気くノ一。何度腰を前後にストロークし、官能の証をマーキングするように撒き散らす。
　もはや陥落も近いと悟り、肉剛が奥へ奥へと侵入していく。
（ダメよ、私は日本一の不知火舞よ？！　お、犯されて、負け……それを千回もだなんて、有り得ないわっ！）
『ごづんっ！！』
「あああぁぁぁ〜〜！！♥♥　子宮っ！♥　子宮口おおおおおお！！♥♥」
　とうとう肉槍の先端がポルチオを捕らえた。屈服した子袋は引く肉剛を追うようにぐんぐん位置を下げ、抉られてはその口を開いてむしゃぶりついている。
（ダメっ、腰が、子宮が勝手にぃっ？！）
　媚肉は意志に反してか否か、淫魔の子種を受け取る準備が整っている。肉剛もそれに応じ、射精準備のためその**張りと速度を一段と増し**た。
【とうとう射精るか！　舞、耐えられるのか―?!】
（い、イヤよっ！　また、また中でなんてぇっ！）
『ガン、ガン、ガン、ガンッ！！』
「あっ、ああぁぁぁぁ！♥　中はっ♥　中はぁっ！♥」
（で、でも♥　もう、逃げられないっ！　せ、せめて、イクのは……イクのだけはぁぁぁ……！！）
　ここまで来て、あろうことか**膣内射精で感じるわけにはいかない**。淫念を振り払って最後の力を振り絞る。
「い、イカないっ！！♥　中出しなんかに、チンポなんかに、イカ……」
（こ、こんなチンポなんかに、負けるわけにはいかないっ！　も、もう少しっ！もう少し耐えれば、勝ちなんだから……っ！）
『ごづぅぅっ！！！』
「あっ……!!!♥　イ……カ…な…♥♥」
（だめ、だめだめだめだめぇぇぇぇぇぇ――）

　体験版はここまでです。続きは製品版で！